伊沢修二の公学校規則及び台湾教育行政への影響力の持続性

安達 信裕*

要旨

本論文の目的は、伊沢修二の公学校規則への影響と伊沢の台湾教育行政に影響を及ぼしていた時期について検討することである。先行研究において、伊沢修二の台湾教育行政への影響力は、1897 年 7 月の非職後は限定的となったとされてきたが、本論では伊沢が人脈を使い、1898 年公布の公学校規則に影響を与えていたことを明らかにした。さらに、1899 年の師範学校の設立、書房義塾への改革なども伊沢の教育構想に沿った形で行われたことを指摘した。その後、1899 年を境として、台湾教育行政の方針が大きく変更されていったことを明らかにした。

キーワード：伊沢修二、公学校、公学校規則、師範学校

1. はじめに

本論文の目的は、伊沢修二の公学校規則への影響と伊沢の台湾教育行政に影響を及ぼしていた時期について検討することである。

伊沢修二は、初代学務部部長として、台湾植民地教育の方向性を定めた人物として理解されている。その教育方針とは、台湾人を日本人化することを目的とする同化教育であり、その教育方針に沿って、精力的に台湾教育制度を策定していた。しかしながら、伊沢が教育行政のトップであった時期は、2 年余りでしかない。1895 年 5 月に伊沢が学務部長心得に任命された後、1897 年 7 月には学務部部長を非職となっている。本論で検討する公学校規則は、伊沢の任期中にその起草作業が始まったものの、公布自体は 1898 年 7 月であり、伊沢の非職後である。さらに、当時の総督府の行政の長である民政長官は、同化教育に懐疑的であった後藤新平だった。また、山本によれば、教育費削減の圧力のもと、学務課長児玉喜八の影響を受けながら制定されたという[1]。以上から、伊沢の公学校規則への影響力は限定的であったというのが先行研究における定説である。

結論の先取りになるが、本論文では、公学校規則の制定過程と台湾教育行政の方針を検討することで、伊沢の台湾教育行政への影響が 1899 年ごろまで続いていたことを明らかにする。

まずは、公学校規則の制定過程を明らかにし、次に、伊沢の台湾教育構想を明らかにした上で、その構想に沿った形の教育行政がいつまで続いたのかを検討する。

2. 伊沢修二と公学校規則

領台初期の教育制度は、初代学務部部長である伊沢修二が中心となって制定されていった。具体的に言うと、伊沢は、通訳や教師を育成する国語学校の創設、速成の通訳育成機関兼初等教育機関